花だより　人だより　—　ふみの里から

58 号　特集　シャンソン

2024 年 10 月 30 日発行

発行者　中村啓佑　　大阪市阿倍野区文の里 4－10－5

今年 2 月、吉田正明編『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力—民衆文化の花束—』(大阪大学出版会) が発行された。シャンソン研究会初の書物である。編集長も執筆者の一人。共著とはいえ、この年で著者になれるとは思ってもみなかっただけに、もう嬉しくて嬉しくて、ハシャギまわり、妻にたびたびたしなめられた。

しかし、冷静になって考えれば、科研申請の膨大な書類を作成され、企画から発行まで多大の尽力をされた吉田正明さんのご努力なしには実現しなかった事業である。あらためて感謝申し上げたい。。

1.『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力－民衆文化の花束－』の出版について　吉田正明　p. 1
2. シャンソン研究会　発起人の独り言　三木原浩史　p. 4
3.「フランス語の歌」の 発信基地を目指して　高岡優希　p. 6
4. 二つのシャンソンから　原　素子　p. 8
5. シリーズ　私の来た道　Vivre pour la chanson　中辻純子　p. 10
6.『星の王子さま』への招待　安藤麻貴　p. 12

『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力－民衆文化の花束－』の出版について

吉田正明

本年 2 月 28 日に大阪大学出版会からシャンソン研究会会員による論考集が上梓されました。これは研究会設立 20 周年を機に、会員の優れた論考をまとめ、日本におけるシャンソン・フランセーズの学術研究の発展に寄与すべく、令和 5 年度日本学術振興会の研究成果公開促進費を獲得して刊行されたものです。本著の出版に至るまでの経緯について簡単に記したいと思います。

まずは記念論考集の書籍化に向けて会員の方々から原稿を募り、最終的に 11 名の論考が集まりました。最初は書籍化を引き受けてくれそうな出版社を見つけて執筆者負担で自費出版することを考えていましたが、幹事の高岡優希さんの仲介で大阪大学出版会の川上展代さんを紹介してもらい、さっそく川上さんとコンタクトを取り論考集出版に向けて相談しました。出版条件として求められたのが日本学術振興会の科学研究費助成事業（研究成果公開促進費）への申請でした。もしそれに採択され学術図書として出版助成金が得られれば、出版委員会の承認を経て論考集の出版が実現するということでした。これまで基盤研究（C）で研究代表者として 4 回科研費を獲得したことはありましたが、研究成果公開促進費に応募したことはありませんでした。川上さんからこの話を聞いた時は、正直、かなりハードルが高そうだなと思いました。悩ましかったのは、仮に科研に通ったとしても出版までに相当時間がかかってしまうということでした。もし採択されなかった場合は出版がさらに遅れてしまうというリスクもありました。

（次頁に続く）

しかし意を決し一か八か科研に応募することにし、高岡さんを通じて執筆者の方々にも了解してもらいました。あとはいかに審査員の高評価を得られるような説得力ある申請書を書くかです。川上さんからもアドバイスをいただき、これまで基盤研究（C）と（B）の科研審査員を都合5年間務めた経験を生かして、本著の学術的意義を強調するとともに、今なぜシャンソン・フランセーズをテーマとする論考集の出版が必要であるかということをわかりやすく説得力ある文章で書くことを心がけました。特に気を配ったのは本のタイトルです。読者の興味をそそるような題名にしなければならないと思い、あれこれ思いめぐらせた結果、シンプルながら読んでみたくなるようなタイトルを付しました。それが本稿の表題にある『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力－民衆文化の花束－』でした。申請時に提出する原稿については、川上さんによればそれほど完全なものでなくてもよく、1冊の本として形式的にまとまっていればよいとのことだったので、それぞれの論考を章立てにして整理し、扱われている内容の古いものから新しいものへとほぼ年代順に配置しました。計画調書には当該刊行物の各章の概要を書く必要があったので、各執筆者からそれぞれ要旨を提出してもらい、それに基づいて作文して盛り込みました。その他申請に必要な細々とした書類に関しては、川上さんの協力のもと揃えることができました。かくしてなんとか無事に期限までに科研に応募することができた次第です。

採択の通知が届いたのは昨年の3月のことでした。申請から7カ月余りが経っていました。出版助成金として170万円が交付される予定であると知らされました。夢が叶ったことを早速執筆者の皆様に連絡し、喜びを分かち合いました。川上さんにも吉報を知らせ、いよいよ論考集の出版に向けて本格的な編集作業に着手することになりました。本著に冠する著者名に関しては、私の希望としてはシャンソン研究会編としたかったのですが、生憎、科研申請の際に代表者である私の名前を編者として提出していたために、その部分を変更することができず、やむなく吉田正明編とせざるを得ませんでした。編集作業は執筆者の皆様の協力のもとことのほか順調に進めていくことができました。第2校まではそれぞれの執筆者にご自分の論考を中心に校正してもらい、第3校（念校）は編者の私が最終的に全体をチェックしました。学術書としての体裁を整えるために索引も付すことにしました。索引数が膨大にならぬよう重要事項に絞って索引候補リストを各執筆者から提出してもらい、それを調整して巻末にまとめました。「はじめに」と「あとがき」は編者の責任で私が担当しました。最後にカバーデザインをどうするか決めなければなりませんでした。タイトルと同じようにカバーデザインも読者を惹きつける重要な要素となるので、魅力的なデザインにしようと思いました。候補となるいくつかの画像を執筆者の皆様にも見ていただき、最終的に決めたのが花と蝶をあしらったアールデコ調のデザインでした。これは副題につけた「民衆文化の花束」から連想されたイメージであると同時に、私が所有している1885年に出版されたJ.-B. Weckerlinの*Chansons et Rondes enfantines*に金色で描かれていたアールデコ調のデザインから着想したものです。川上さんにそのイメージを伝えると、出版社専属のデザイナーの方が私の意を汲んで、青地にオレンジ色と黄色の花々とその蜜を吸いにくるひらひらと舞う白い蝶をあしらっていただき、見た目にも魅力的で素敵なデザインを施してくださいました。おまけにタイトルの文字にも工夫が凝らされていて、「諸相」と「魅力」のふたつの漢字の一部に、ターン（回音）や4分休符やフォルテといった音楽記号があしらわれています。

発行部数は全部で600部、そのうちそれぞれ日本学術振興会と信州大学に1部ずつ献本した2部を除く28部が著作権者の私に贈呈されました。そして共著者10名の方々にも按分し贈呈させてもらいました。シャンソン・フランセーズをテーマにした本学術書が幅広い読者の方々の興味を引き、手に取って読んでいただければ嬉しく思います。そして日本において本著が本格的なシャンソン・フランセーズ研究の呼び水となり新たなシャンソン研究の地平を拓いてくれることを切に願っています。

各章のタイトルと執筆者

はじめに　吉田正明
第1章　「民衆のシャンソニエ」ルイ・フェストーに関する一考察　本間千尋
第2章　19世紀フランスの歌姫ポリーヌ・ヴィアルド　村田京子
第3章　街角の音楽師　―19世紀を中心に　中村啓佑
第4章　フランスの子ども歌の誕生　吉田正明
第5章　子ども歌と小さな虫たち　金山富美
第6章　シャンソン「サクランボの実るころ」－*Le temps des cerises*－　三木原浩史
第7章　「シャ・ノワール」におけるシャンソンの担い手をめぐる諸問題　岡本夢子
第8章　マルグリット・モノの「シャンソン」
―　「シャンソン」の成立おける芸術音楽の影響をめぐって　樋口騰迪
第9章　バルバラ、父、そして母　高岡優希
第10章　バルバラの『ゲッティンゲン』(1965年)
―歌の成立をめぐる仏独交流―　中祢勝美
第11章　シャンソンの闇鍋　―対訳の試み12篇―　戸阪律子
あとがき　吉田正明

シリーズ　ことばをたどると

「シャンソン」　と　*chanson*

上の論文タイトルを見て、「おやっ？」と思った方がおられるかもしれないので、「シャンソン研究会」が対象としている「シャンソン」とはどのようなものかを、私なりに考えてみたい。

「シャンソン」は、「フランスのはやり歌、それも恋をテーマにした軽い歌」と考える方も少なくない。しかし、フランス語 *chanson* の意味は、もっともっと広い。確かに *chanson populaire* だが、この場合の *populaire* は元々「民衆の」という意味だから、広く労働歌や軍歌、こどもの歌、戯れ歌まで含まれる。民衆の口伝えに広まっていくという意味でポピュラーソングなのだ。それに対してオペラなどで歌われるのは *chant lyrique*、賛美歌、聖歌、国歌などは *hymne* と呼ばれる。シャンソン研究会が研究対象にしているのは、「もっとも広い意味でのシャンソン」だと思っている。だから、私のような異端まで参加できるのだろう。(編集長)

三木原さんとは 30 代で関西学院大学の同じクラスを担当して以来、ほぼ 50 年のつきあいになるでしょうか。ある時期からの研究活動、その成果の出版に目を見張るものがあります。2002 年にはシャンソン研究会を立ち上げられました。この研究会がなければ『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力』の出版も、拙論の寄稿もありえなかったわけで、その意味でも、三木原さんへの感謝の気持ちは大きくなるばかりです。

なお、タイトル内の画像は、三木原著『追憶』（彩流社、2017）裏表紙から

シャンソン研究会
発起人の独り言

三木原浩史

私がシャンソン・フランセーズについての作品論を執筆し始めたのは、大阪教育大学に勤務していた 30 代初めでした。初級フランス語の授業中、コーヒーブレイク風に、カセットテープで流したシャンソンにインスピレーションを受けてのことです。最初の作品は、子どもの歌 *Au clair de la lune*（月明りのもとで）、ついでだれしも知るシャンソン *La mer*（海）……と、ただただ楽しく、次々と歌詞分析を試みていましたが、気づいてみれば、50 代半ばになっても、この領域へのアプローチは、私の「一人旅」に近い状態でした。

そのような折、信州大学人文学部仏文分野に 2 度も集中講義に招かれて、当時、助教授だった 19 世紀フランス詩の研究者、吉田正明さんが NHK 文化センター松本教室で、シャンソン・フランセーズの訳読を兼ねた歌唱指導をしているのを知りました。

2002 年 12 月 1 日、思い立って松本に向かい、吉田さんに「シャンソン研究会」立ち上げの相談といくつかの提案をしました。きわめて具体的に。場所は、いまは存在しない駅前の東急ホテルのロビーでした。シャンソン・フランセーズという、日仏の講壇アカデミズムが研究対象としない未知の広大な領域を、仲間とともに歩んでみたいという願望からでした。

吉田さんからは、即、快諾を得ました。こうして「一人旅」は、「二人旅」になりました。それだけではありません。私が来松すると知って同席してくれていた京大仏文科の同窓、山本省、滝澤壽の 2 氏が、自ら入会を申し出てくれました、―「シャンソンには興味がないが、研究会には人数も必要やろから」（山本氏）と。そう、必要です。「二人旅」は、瞬時に「四人旅」になりました。山本氏の真率で温かいことばが、前途を照らしたような気がしました。

「研究会」は年 2 回、春と秋。会費無料。参加自由。代表と幹事によるヴォランティア運営。会場は、当面、神戸大学と信州大学の教室を借りて。研究会本部は、小澤征爾主導の「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」の向こうを張り（笑）、同じ松本市内、信州大学人文学部の吉田正明研究室としました。思えば懐かしい気概ですが、本音は、私と吉田さんの年齢差 10 歳を考えて、定年までが長いほうに置こうということでした。

そして、研究会代表は吉田さんに、私は幹事として裏方に回り、雑務一切を引き受ける案で進めようとしましたが、同窓のひとりに反対されました。長年、シャンソン論をやってきた私が、まずは代表をやって、２～３年後に、速やかに若い吉田さんと交代するように、と。実際、そのような運びになりました。

（次頁に続く）

まだ、E-mail でのやり取りが限られていた時代のこと、研究会案内や研究会後のレジュメ送付は、すべてコピーを取って郵送しました。５～６回目の研究会で、会員が 20 名を超え、運営が安定しましたので、予定通り、吉田さんと代表を交代し、私は幹事として引き続き従来の雑務一切を担いました。この役目は、高岡優希さんが入会され、幹事を引き受けて下さるまで続きました。

研究会である限り、『シャンソン・フランセーズ研究誌』を発行するべきだという思いは最初からあり、吉田さんに提案、賛同を得ました。そこで、原稿用フォーマットを作成し、書き込んだものを両面印刷し綴じるというやり方で、1 頁 700 円程度で上がる工夫をしました。8 頁の論考なら、執筆者負担は 5600 円です。『研究誌』全体で 100 頁になっても、印刷屋の支払いは 7 万円ですむということです。会員への発送は、当初だけ私、あとは高岡さんが引き受けて下さり、現在に至っています。会員数が増え、大変な作業になっていると思いますが。

言い出しっぺというものは、傍迷惑を省みず、最初に抱いていた夢をどんどん肥大させるもののようです。『研究誌』が年 1 回刊行されるようになり、研究会も 10 年目を迎えたころ、満を持して、書籍形式の「研究書」発行を吉田さん高岡さんに提案しました。研究会の存在を広く知らしめるためです。実現には、定年を迎えた暇な私が汗をかくつもりで話し合いを続けたのですが、代表・幹事とも全盛期で超多忙、時期尚早の感を否めませんでした。そしてついに、私の最初の提案から 10 年後、今度は定年を迎えた吉田さんが、日本学術振興会の研究成果公開促進費を獲得し、懸案の研究書、吉田正明編『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力―民衆文化の花束』（大阪大学出版会、2024 年）出版を成し遂げてくれました。快挙です。その経緯は、別稿で、吉田さん自身が語ってくれるでしょう。

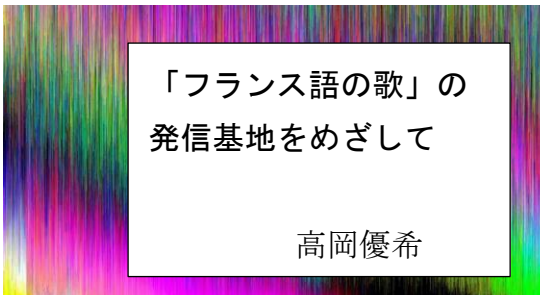
最後に、「シャンソン研究会」の 2024 年現在についてです。わずか 4 名で発足した研究会でしたが、22 年後の今日、研究会員は 135 名 を数えるまでになりました。フランス語、フランス文学、フランス言語学、フランス音声学、フランス音楽学、フランス美学、フランス歴史学といった「フランス学」の専門家だけでなく、シャンソン歌手や、ショービジネス関係者、シャンソン・コンクール主催者、そして決して忘れてはならないシャンソン愛好家たちからなっています。

今年、喜寿を迎えた私にとって、かけがえのない研究会です。代表の吉田正明さん、幹事の高岡優希さん、そして研究会を育んでくださった皆様方に、心から感謝します。

シャンソン研究会を機縁に生まれた最近の作品を紹介します。

1. フロランス・トレデス著/緒方信雄訳・高岡優希監訳『ジョルジュ・ブラッサンス―シャンソンは友への手紙―』〔鳥影社、2024 年 6 月〕
2. 三木原浩史著『フランスの子どもの歌 50 選-読む楽しみ-』（2021 年 4 月）、三木原浩史・吉田正明共著『フランスの子どもの歌Ⅱ50 選-読む楽しみ-』（2023 年 1 月）/『フランスの子どもの歌Ⅲ50 選-読む楽しみ-』（2024 年 7 月）、以上、鳥影社。

高岡優希さんについては、これまでも何度か記事や写真をいただいているので、詳しく紹介するまでもないだろう。高岡さんの活動はひと言で言うと、フランス語教育＋シャンソン研究＋シャンソンの歌唱ということになるだろうか。シャンソン研究会の運営に携わっておられるが、今回は、主として、個人の活動を中心に書いていただいた。



「フランス語の歌」の発信基地をめざして

高岡優希

実は私は「シャンソン」というカタカナが好きではありません。シャンソン研究会の幹事のくせに何をゆうとるんじゃ、とお叱りを受けそうですが。それは日本語で「シャンソン」と言った時には本来のフランス語の意味ではなく、一つの音楽のジャンルを表す用語として独り歩きしているからです。フランス語の une chanson は英語の a song に相当します。つまり、「歌」「世俗歌謡」を指す言葉であり、決して時代や傾向、内容が限定されているものではないのです。そして歌は現代まで生まれ続けています。新しい歌手もいれば、日本では無名のフランスでの大御所もいます。フランスでは誰もが知る大ヒット曲でも日本では無名な歌もあります。残念な限りです。シャンソン研究会の活動の一端として、そんなフランスの歌の様々な側面をお伝えできる情報の発信基地になれたら、というのが微力ながら私の目指すところです。

そのために、まず紹介する場を設けようと思っています。知る機会がないから知らないだけ、知らないから好きになれないだけで、素晴らしい歌手や歌は溢れています。

◆研究会の活動として年 2 回の研究発表会と、年 1 回の研究誌発行を行っています。私はその双方への毎回の参加を自分のノルマとしています。ご参考までに研究誌に掲載した論考のタイトルだけご紹介させてください。研究会に参加した 2010 年の第 2 号からです。

ヴルズィとスション
彼らの評伝《 Alain Souchon Laurent Voulzy — Destins et Mots croisés 》の表紙から

第 2 号：アダモと「インシャラー」—その歌詞改訂の歴史—
第 3 号 ：ジュリエット・ヌレディンヌ —巧みな歌詞と魅惑の旋律、そして轟く美しき咆哮—
第 4 号：寡作の巨人ロラン・ヴルズィ 一盟友アラン・スションとともに醸し出す極上の世界—
第 5 号：トマ・フェルセン —言葉の魔術師と呼ばれる変な奴—
第 6 号：ストロマエの行方 —その活躍に垣間見える現代音楽シーンの傾向—
第 7 号：ヒロシマからナガサキ、そしてフクシマへ —核を巡るシャンソン—
第 8 号：「憎しみも、武器も、暴力もなく」アラブ系ミュージシャンの声 —アッシュ・カーと「芸人」たち
第 9 号： バルバラ 社会を見つめるその眼差し —平和を祈る歌の数々—
第 10 号：バルバラ II —父を巡る 4 部作—
第 11 号：バルバラ III —母を巡る歌—
第 12 号：バルバラ IV —『リリーパッション』
第 13 号：アカディを超えて「エヴァンジェリンヌ」—希望を持ち続ける人の歌—（次頁に続く）

上記のリストの中で、日本で知名度のあるのは、アダモとバルバラくらいでしょうか。バルバラについては 4 年間かけて書いた内容を、吉田正明氏が言及された研究会の論考集にまとめて執筆いたしました。そしてアダモの「インシャラー」の歌詞変遷の歴史ですが、日本では今も最初の歌詞の訳で歌われ続けていますが、もうその歌詞で歌わないで欲しいと願っています。不用意にイスラエルを支持する歌詞を書いてしまったアダモは、その後の世界情勢の変化とともに苦悩し、何度も歌詞を書き替え、最終的にはイスラエルとアラブ世界双方の平和を祈る内容に書き換えています。彼はあるインタビューで、最初の歌詞を書いたのは無知のゆえであった、とその非を認めておられました。

バルバラ

◆『シャンソンマガジン』（発行元：歌う！奏でる！プロジェクト）というシャンソン関係者用の季刊誌があります。そこに毎号研究会として執筆させていただいていますが、所謂「シャンソン」ではなく、幅広く「フランスの歌」を紹介すべく、私を含め他の研究会会員の方々にも書いていただいています。日本のシャンソン界で活躍しておられる方々に、いろんな歌手や歌を知っていただき、それを広めていただけたら、と思っています。

◆10 代の学生たちを啓蒙すべく、大学の授業で毎時間 1 曲ずつ、新旧取り混ぜて「フランス語の歌」を紹介しています。ここでは「シャンソン」とは言いません。既に 20 年くらい前から若い世代にはシャンソンという言葉は死語になっているのです。「先生、シャンソンって何ですか？」ときかれ仰天して以来、「シャンソン」はやめました。でも、彼らはいいなと思ったら Youtube で検索したり、歌手の写真をスマホの待ち受け画面に入れたりしています。

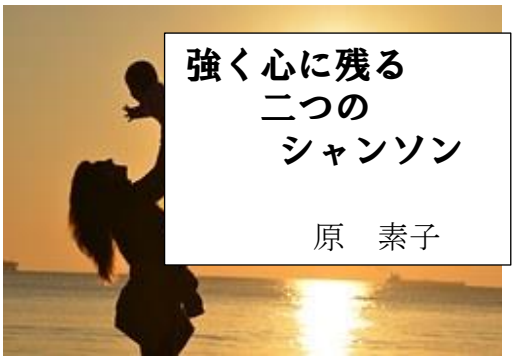
◆カルチャーセンターでフランス語で歌う講座を持っております。そこではよく知られた名曲に加え、毎学期、新しい歌を導入しています。21 世紀の歌手たち、例えばパリオリンピックで「イマジン」を歌ったジュリエット・アルマネなども取り上げました。ご年配のシャンソン好きの方々も気に入ってどんどん歌ってくださいます。先日はフランス人なら誰でも知っているルノーの大ヒット曲「ミストラル・ガニャン」を練習しました。その歌いにくさにも拘わらず多くの方々が取り組んでくださり、御年 90 歳の方まで、マイクを握ってお一人で歌ってくださいました。

ジュリエット・
アルマネ

いい歌やいい歌手をたくさん知っていただきたい、知ったら好きになっていただける、と信じています。フランスの歌を未来につないでゆくための情報の発信基地でありたいと思っています。

（終わり）

原素子さんは、何度かこころに残る原稿を寄せてくださったので、ファンも多いのでは。娘さんの、海外での結婚式や、お医者さんで、映画が好きだったが、急患のあるたびに映画館で呼び出されるお父様の話など、ご家族にまつわる話が印象に残っています。今回は、母と子をテーマにしたシャンソン、それも、高岡優希さんの教室で習って強く心に残った二つシャンソンの話です。



強く心に残る二つのシャンソン

原　素子

「フランス語を楽しく学びたい」と思い、ＮＨＫ文化センターで行われている高岡優希先生の「シャンソンの花束～フランス語でシャンソンを歌いましょう」というクラスに在籍しています。様々なジャンルの歌を教えていただきましたが、その中で強烈に心に残っている曲があります。

1 曲目はカロジェロが歌っている「母の肖像　*Le portrait*」（2014）です。

教室で配られた歌詞のプリントを見ながら初めて聴いたこの曲に、どっと涙が溢れました。内容は次の様なものです。

主人公の子供には、もうお母さんがいません。「ママンは空にいるよ」と他の人に言われたから、空を飛ぶ飛行機を見ると「ひょっとしたらママンだ」と独り言を言います。

夜になると、彼は肖像画を見ながら床の上に丁寧に絵を描きます。そしてその上に寝そべり、チョークで描かれた母の腕の中で夢を見るのです。一年に一度でもいいから優しく抱きしめて欲しいと思いながら。

また次の様な一節があります。…彼は教室で先生に、親と書き両親と書かない理由を説明する…この部分から父親はいないと思われるので孤児なのでしょう。

この子が親に甘えて過ごすことができたのは、ほんの僅かな間だったわけですが、それでも、これほどまでに一途に母を慕う気持が私の胸を締め付けます。

私達がこの曲を習ったのは 2017 年 9 月ですが、2024 年現在、世界各地の紛争は激化しており、更に悲惨な状況が起こっています。今私達と同じ空気を吸って生きている戦いの中のこれらの方々のことをを思うと、美しいメロディーとカロジェロの優しい声が一層深い悲しみを誘います。

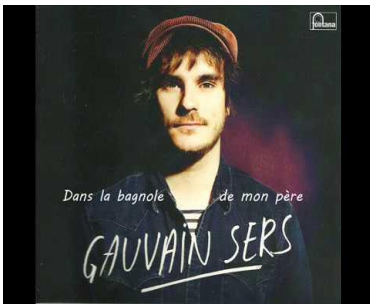
―　彼は床に寝そべり夢見ている、母の腕の中で。チョークで描かれた母の腕の中で。毎晩こっそりと彼はこの絵を描いている。丁寧に肖像画を見ながら。―

写真はカロジェロに Le portrait を生み出すインスピレーションを与えたと言われる写真です。当初は「イラクの孤児院で撮られた写真」と誤解して報道され、世界に衝撃を与えました。しかし実際はイラクの写真家 Bahareh Bisheh が、小さな従妹が遊び疲れて地面に描いた絵の中で眠りにおちた姿を撮ったものでした。この少女に両親はいる、とのことで悲劇的な写真ではありませんでしたが、無邪気に眠るこの少女のことを想えば、逆に胸をなで下ろしました。　（次頁に続く）

https://www.youtube.com/watch?v=uzf7pri_Gpk

もう一曲は「息子はジハードに参戦した　*Mon fils est parti au Djihard* 」ゴーヴァン　セール作詞作曲（2015 年）です。（以下の URL　https://www.youtube.com/watch?v=p_cQaA1_tsU で聞くことができます）

ある青年の実話を、報道と彼の両親の談話をもとにゴーヴァン・セールが作り、歌っています。優しく控えめ、サッカーに興じ教育者になるのを夢みていたごく普通の 10 代の青年が、インターネットを通してイスラム原理主義に洗脳され自爆テロを実行して死亡します。



2017 年の、ゴーヴァン・セールのアルバムのジャケットから

こういう事件が報道された時、一体親は何をしていたのか?彼らは何故あんなひどい事ができるのか?と私はいつも考えていました。しかしこの曲を通して、彼の母が「何故私は何も見えていなかったのか、全て私のせいだとわかっている」と過激な行動に走った息子に対する衝撃と怒りを語るのを聞き、この様な事件への見方がかなり変わりました。

―彼が言ったことを全て思い出す。長時間パソコンに向かっていたことも。

そこから奴らは迎えにきたのだ。

若い病人を助けるのだと信じて息子はジハードに参戦した。

彼はバクダッドに飛び立った、息子はジハードで死んだ。―

ごく普通の家庭で育った、柔らな頭脳の 10 代の若者がインターネットを通して洗脳される怖さに、改めて問題の根深さを強く感じます。

淡々と歌うゴーヴァンの歌声がよけいに真実を強く訴えてきます。この 2 曲は You-tube で聴くことができますので、ご興味がおありの方は、どうぞお聴きになってください。

このクラスに入らなければ、この様なシャンソンに出会うこともなかったでしょう。

シャンソンは、テレビ画面や新聞誌面による報道とは全く異なる方法で、時に深く厳しい世の中をくっきりと教えてくれる、私には素晴らしいツールです。　（終わり）

編集長のひとりごと

数年前のこと、「シャンソン研究会で発表する」と言ったら、妻は袖にすがって「それだけはやめて」と言った。私がシャンソンを歌うと思ったのだ。けた外れの音痴は、友人の間でも有名である。だから、私が「シャンソン研究会」に席を置いていると言うと、たいていの人は驚く。

私が研究会に入っているのは、もちろん研究のためである。3 ページのリストからもわかるように、多くの方が曲そのものや歌手を研究されているのに対して、私が関心をもっているのは、街角の歌い手や演奏者、今で言う「ストリート・ミュージシャン」、名もなき人々である。

今から 20 年程前、*spectacle* に興味をもった。フランス語 *spectacle* は、借用語「スペクタクル」よりもっと意味が広い。興味を惹く光景なら何でも *spectacle* であり、もっと狭くなると映画、演劇、ショー、大道芸などが含まれる。**小さなスペクタクル**も存在するのだ。中でも、なぜ、特に無名のミュージシャンたちに興味をもったか？　狭い枠の中でとうてい説明できるものではないが、あえて言うなら、これまでフランス文化といえば、輝かしい側面ばかりが紹介されて、巷の文化、**民衆文化**に光があてられなかったからだ。シャンソンは**民衆文化の花束**。ここにシャンソン研究会と私の接点がある。。

50 数年前、フランスでの学生バス旅行の車内！「歌います」は、*Je vais chanter…* ではなく、*Je vais interpréter...* だと知った。初めて中辻さんの歌を聴いたとき、なるほど、これが *interpréter* なのだと思った。うまく歌うのは当たり前、そこに個性がないとプロとは言えない。少し低めの、そして伸びやかな声で歌われる「パリの空の下」は、他ならぬ中辻さんのものだった。「人の気も知らないで」を聴いたときはゾクッとした。だんだんに外出しなくなってコンサートから遠ざかっているのは残念である。ますますのご活躍を！。

シリーズ　私の来た道

Vivre pour la chanson

中辻純子　（梨里香）

まもなくデビュー20 周年を迎えます。年齢から考えると、はて？と訝られる向きもあるかと思いますが、人生後半に入ってのシニアデビュー。たかが 20 年、されど 20 年…自身では、よくぞここまで、というのが実感です。

幼い頃から歌うことは好きでした。何故シャンソンかと問われると、おそらくは学生時代に我が家に頻繁に訪れていたシャンソン好きの叔父の影響でしょう。ギターを片手に優しい声で歌う叔父の歌は、幼子が初めて聞く童謡の様なものだったのかもしれません。私の心にそれらの歌はいつしか住み着いていました。思春期を迎える頃には、私はすっかりシャンソン好きになっていました。音楽の授業の自由課題に「愛の讃歌」の弾き語り、フランス人歌手のコンサートと言えば、誰かれなく聴きに行っていました。声楽やクラシックピアノも学びましたが、大学卒業後は、一般企業に就職しました。時代は男女雇用機会均等法の施行される以前のこと。ただ忙しいだけの明日の見えない毎日、女子に会社での未来はありませんでした…これで良いのだろうかという考えが沸々と起こり、或る朝、突然覚醒しました。「そうだ！シャンソンで生きていこう！！」

無謀ともいえる転身でしたが、根拠のない自信は若さ故のこと。時間的に融通の利く職場に変わり、著名なシャンソン歌手の方に歌を習い、フランス語習得のために留学もしました。あるレコード会社の方に見いだされ、そのままデビューかと思いきや、人生は思いもかけない方向に進んでいくものですね。20 代半ばで結婚をし、まもなく子どもを授りました。2 歳違いで男の子を二人。長男一人の時は、母に助けて貰いながら、仕事も勉強も何とか続けられましたが、次男が生まれてからは全てが殆ど不可能になりました。育児と生活に追われるようにして暮らしているうちに、いつしか夢は日々の生活の中に埋もれて行ってしまいました…。

パリ第 4 大学（ソルボンヌ）

1984 年留学

けれども、子育ては次第に楽になるものです。仕事に少しずつ復帰していきました。語学教師やフランス語を使う職場で働き始め、それなりに充実した毎日を送っていたつもりでした。しかし、どこかが違っているのです。何か違和感があるのです。心の奥底で、これでいいのか、このまま終わっても…と言う声がするのです。そう、そしてその答えはとうに分かっていました。それはシャンソンなのです。シャンソンなしの人生なんてあり得ないのです。

ちょうどその頃、NHK ラジオのフランス語講座で松島征先生の『20 世紀のシャンソン～反骨の詩人たち』が放送されていました。テキストで拝見する作務衣姿の温厚な面差しとラジオから流れる渋い声の鋭い解釈と解説に「そうだ！松島先生に習おう！！」と人生 2 度目の覚醒をしました。京都大学の松島教授の門戸を叩き、それからご退官までの数年間と急逝されるまでの都合 10 年余り、ご専門の記号論から文学作品、シャンソン・フランセーズに至るまで様々にご指南頂きました。

（次頁に続く）

さて、一歩踏み出すと、ものごとは次々進んでいくものです。松島先生は歌手の方々とも親交があり、その中のお一人の勧めで受けたオーディションに合格し、晴れてシャンソン歌手デビューできることとなりました。思いもかけないことでしたが、ついに20代の夢が叶ったのです。人前でシャンソンが歌える…それだけで幸せ、まさにこの世の春でした。こんな奇跡みたいなことが人生に起こるのだろうかと有頂天でしたが、その喜びはそんなに長くは続きませんでした。それは、むしろプロとしての苦労の始まりでした。ステージは歌だけで出来上がっているのではありません。曲のアレンジやミュージシャンの選択、メイクの仕方やドレスの調達の方法等、まるで何も分かっていません。未熟さと緊張のあまり、毎回反省していたように記憶しています。デビュー当初のお客様には今でも申し訳なかったと思っています。

それでも、歌い始めて1年もすると、メイクやドレスは板についてきました。歌も段々こなれてきます。でも、その頃になると、正しく美しく歌えばそれで十分なのか、いやそうではないということに気づき始めます。プロとして歌うとはどういうことなのか、聴く人を楽しませたり、慰めたりできているのか、その歌の情景や心情が浮かんで来るのか、そしてその歌い手だけの世界があるのか…20年経った今も、自問自答しながら活動を続けている毎日です。

フランス語で歌うことが、私のモットーです。これは松島先生から薫陶を受けた歌手としては、絶対守るべき信条の一つですが、時として、音楽は言葉を越える時があります。それ故、日本語で歌ったり、また、日本の楽曲をフランス語に訳し歌ったりもします。特に後者は、原詞を重んじるという立場からは大いなる逆説なのですが、それもまた真なりと思うのです。付け加えて言うならば、シャンソンの魅力に次世代の人々や多くの方々に気付いて貰うために、馴染みある曲をフランス語で聴く楽しさや面白さを感じて頂こうという企てです。そして、本家本元のシャンソン・フランセーズに耳を傾けて頂くきっかけになれば…と願っています。

シャトレーでのパリ初ライヴ　2013年

今春、『BENTO』なるアルバムをリリースしました(写真左下)。「夜桜お七」から「AKB48」まで、「昭和歌謡」から「アニメソング」まで全10曲をフランス語でお楽しみ頂けます。梨里香ワールドのひとつの試みです。来春はフランスでも披露できるよう、目下、計画中です。

ところで、今夏のパリはオリンピック一色。開会式をご覧になられましたか？エディット・ピアフの「群衆」、「パダン・パダン」やジジ・ジャンメールの曲が流れていましたね。極めつけはフィナーレのセリーヌ・ディオンが歌った「愛の讃歌」。シャンソンは、今もフラン人の心に深く根付いています。　　(終わり)

＊『BENTO』というタイトルは現在フランスで流行っている弁当に由来します。

『星の王子さま』への招待

6.―「ぼくの花……ぼくはあの花に責任があるんだ！」

安藤麻貴

王子さまと出会って 8 日目、パイロットの飲み水が底をつき、王子さまの提案で二人は井戸を探しに出かけます。そしてクライマックスにかけて、「心で見なければ、よく見えない。大切なものは目には見えない」という主題が掘り下げられます。夜の砂漠で、王子さまは次のように言います。

「星々が美しいのは、目には見えない一輪の花がどこかに咲いているからなんだよ……」

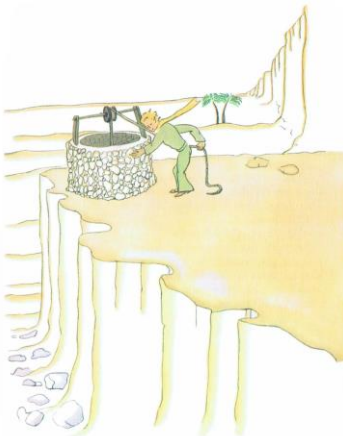
「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからなのさ……」（ともに第 24 章）

この言葉によって、砂漠がなぜ「神秘的な輝き」を放っているように見えるのかを理解したパイロットは、子どもの頃に住んでいた古い家のことを思い出します。宝物がどこかに埋もれているという言い伝えによって、家全体が魔法にかけられていたように感じたことを……。

目に見えないものが美を創り出すのは、星、砂漠、家といった風景やものばかりではありません。パイロットは、眠る王子さまを抱えて歩きながら、その内側にも目を向けています。

「王子さまの寝顔を見てこれほど心を揺さぶられるのは、王子さまが一輪の花に忠実だからだ。一輪のバラの面影が、王子さまが寝ているときでさえ、ランプの炎のように彼の内部で光り輝いているからだ……」（第 24 章）

こうしてパイロットは、目に見えない大切なものに開眼していきます。その集大成として現れるのが井戸です。この井戸はそもそも、砂漠にはありそうにもない、滑車、桶、綱を備えたフランスの村にあるような井戸であり、幻の様相を帯びています。そしてその水は、単に喉の渇きを癒すという以上に、「水は心にも良いものだよ」という王子さまの言葉が示すように、心を潤すものとして描かれています。実際、二人で協力して見出だし、パイロットが自ら汲み上げて王子さまと分かち合う水は、友情の証しであり、祝祭のような心地よさをもたらします。パイロットは、幼き日の心温まるクリスマスの思い出、彼の記憶にある「輝き」を呼び起こすのです。「人々が探し求めているものは、たった一輪のバラやほんの少し水の中に見つかるかもしれないんだよ……」という王子さまの言葉は、幸福の本質とは何かを教えてくれます。



（次頁に続く）

至福の時も束の間、二人に別れの時が近づきます。パイロットの心身の回復を反映するかのように飛行機の故障は直り、一方、王子さまは絆を結んだバラのもとに戻る手筈を整えます。「ぼくの花……ぼくはあの花に責任があるんだ！」と言い残し、地球に降り立って一年という節目に毒ヘビに自らを咬ませます。倒れたあと、その体は見つからなかったとありますから、王子さまは何らかの形で彼の星に還ったと考えられます。彼は無事バラに再会できたのでしょうか。誰にも知る由はありません。ただ、私たちには王子さまに再び会えるかもしれないという希望が残されています。

最後の挿絵には、王子さまが去った地点の砂漠の素描と星がひとつ描かれています（右図参照）。心で見ることができれば、ここに王子さまを蘇らせることが可能なのです。夜空を眺めても何も感じないのか、星が王子さまの笑い声を響かせて「五億個の鈴」に変貌するのか、全ては読者である私たち次第です。

最後に、物語の結末と作者の最期の符合についてお話しておきましょう。サン＝テグジュペリは、『星の王子さま』を出版して間もなくアメリカを発ち北アフリカで戦線に復帰、翌年の 1944 年 7 月 31 日、コルシカ島から偵察飛行に出たまま、帰らぬ人となります。王子さまと同じように遺体も見つからず、長年その最期は謎に包まれたままでしたが、1998 年、マルセイユ沖でサン＝テグジュペリが身につけていたと思われるブレスレットが見つかり、二年後に搭乗機の残骸が同海域で発見されました。ドイツ軍パイロットに撃墜されたとのことです。

作家が最後に身につけていたと思われるブレスレット。

作家と妻の名、アメリカの出版社とその住所が刻まれている。

Epave de l'Avion P-38 d'Antoine de Saint-Exupéry, Riou, Cap Saint-Exupéry, Marseille (tourisme-marseille.com)

サン＝テグジュペリは、彼にとってのバラとも言える、大切な家族、親友、彼らを脅かすナチス・ドイツの占領下にある祖国フランスのために、責任を果たそうとしたと考えられます。その彼が、死を覚悟しながら、この世に送ってくれたのが、王子さまという存在です。

サン＝テグジュペリは王子さまを通して、「あなたにとって本当に大切な存在は誰ですか」「生死を超える人生の価値をあなたは何に見出しますか」と問いかけているように思います。優しい空気をたたえた小説でありながら、限りある人生をいかに生きるか、について切実な問いを投げかける物語であると言えるでしょう。（おわり）

執筆者より一言：お読みくださった皆さま、ありがとうございました。本連載を機に、『星の王子さま』を（再び）手に取ってみたいと思っていただければ幸いです。貴重な場をご提供くださいました中村啓佑先生に厚く御礼申し上げます。

―　「シャンソン特集」、いやはや、随分遅れてしまった。早くに原稿を頂いていた執筆者の方々、どうかお許しください。編集の不手際に家庭の事情も重なってしまった。確かに、「花だより」は私の道楽には違いない。しかし、道楽とはいえ限度というものがある。自分で勝手なことを書いているなら別だが、執筆をお願いしている以上、それは社会的行為であり、暗黙のルールが生じる。

―　「特集　シャンソン」、メインは『シャンソン・フランセーズの諸相と魅力―　民衆文化の花束』を知っていただくことであり、それを出版した「シャンソン研究会」の紹介である。

―　「本はどうすれば手に入るか」というお尋ねがあるので、簡単に書いておく。もちろん、以下の大阪大学出版会に直接注文することもできるが、3 ページのリストにある筆者の一人を通せば２割引きとなる。それでも 6000 円をわずかに越えるから、おいそれとはお願いしにくい...

大阪大学出版会　大阪府吹田市山田丘２－７　大阪大学ウエストフロント　TEL 06-6877-1614

―　臨時増刊号の錦影絵は、ずいぶん反響を呼んだ。このような、映画が出現する前の映像文化が江戸時代に発達していて、しかも、それを発掘して公演している人があることに驚いた。さらに驚いたのは、読者の中に、池田光恵さん指導の下、上演に参加した人がおられたこと！世間は狭い！そして、本紙読者の好奇心、冒険心に喝采！

―　11 月 17 日（日）の、吹田市立博物館における公演には編集長も行くつもり。もうすでに、何人かの方々と約束をした。久しぶりにお目にかかる方もあって今から楽しみにしている。引率はできないが、邪魔にならないようについていくつもり。ただし、年が年だから体調の急な変化があって不参加となった場合は、どうか、お許し願いたい。

あなたの「花だより」を作りませんか

特集「旅」III といっしょにお届けした臨時増刊号「錦影絵とデジタル紙芝居」の配布を決めたとき閃いたのです。「これを例外とせず『花だより』を読者に開放してはどうか！」と。あんな立派なものでなくてもかまいません。皆さんに発信したい何かがあればいいのです。ページ数も、形式も問いません。どこかに「花だより　臨時増刊号」と書いてあって、編集者の名前があれば十分です。写真も画像もいりません。初めて作った学級新聞のようなものでも送ってくだされば読者に配布します。もちろん、「花だより」の精神に反するものは困ります。

「せっかくだから、写真や画像を入れ、見出しの文字の大きさも変えて、少しは新聞らしいものにしたいが、どうすればいいかわからない」という方は、私に相談してください。直接お会いしてテキストボックスの使い方を教えます。テキストボックスが使えると紙面が一挙に華やかになります。30 分もあれば簡単に覚えられます。もちろん、ワードが使えることが必須条件ですが。

最初から、かっこいいものを考えず、少しずつ覚えていけば、そのうち、だんだん編集の技術が身につきます。大事なのは好奇心と意欲。伝えたいことがあれば、あなたも立派なアマチュア編集者になれます。「花だより」支局を作りませんか。支局が本社を凌駕することを願いつつ。　（編集長）